

コロナ時代から見る疫病蔓延下「崇神紀」の陶邑（誤った認識改めて）

品川 清

二〇一九年十一月中国武漢市の海鮮市場発生のコロナウイルスは、九ヶ月間で世界中に蔓延。死者百万人。（二〇二〇年八月現在）感染者は自らの苦痛と、他者から嫌悪・差別される恐ろしさ。残酷・差別と慈悲を併せ持つ人心の怪しさを改めて知り、神仏に頼った古代人の気持ちに身近に思う。

今まで、古代史の疫病記事を見ても気にならず読み流したが、改めて古代の疫病の時、人心・政治・経済に、どのような変化が起きたのかと思うようになった。

『日本書紀』崇神天皇の条に疫病蔓延の記述がある。そこに、百舌鳥古市古墳群時代に創設された「陶邑」が現れている。何故だろう。

千七百年前、実在した可能性のある最初の天皇は「ハツクニシラス・ミコト」と『日本書紀』に記されている崇神天皇（第十代）であり、考古学的に古い古墳・行燈山古墳（AC三〇〇〜三五〇年）がある。今も人々が訪れ、崇神天皇の実在性を感じさせるように陵墓として整備されている。この崇神天皇の即位五年目に、とんでもない疫病が日本を襲った。実は、この疫病を収める過程で伊勢の祭祀が始まる。

『日本書紀』の記述を読もう。

「崇神五年に、国内に疾疫多く、民死亡れるものありて且大半ぎなむとす。」なんと住民の大半が疫病で死んだ。六年に、「百姓流離へぬ。或いは背叛くもの有り。その勢い、徳を以て治めむこと難し。」

翌年、人々は疫病を恐れて土地を離れる者もあり、暴動も起きた。そこで、天皇は朝な夕な神に謝罪し祈った。

『是を以て、晨に興き夕までに惕りて、神祇に請罪る。是より先に天照大神、倭大国魂、二柱の神を天皇の大庭のうちに並祭る。然してその神の勢いを畏りて、共に住みたまふに安からず。故、天照大神を以ては、豊鋤入姫に託けまつりて倭の笠縫邑に祭る。（略）日本大国魂神を以ては淳名城入姫に託して祭らしむ。然るに淳名城入姫髪落ち体瘦みて祭ること能わず。」

『七年春三月丁丑の朔辛卯、詔して曰く「略、数災害有らむことは、恐るらくは、朝に善政無くして、咎を神祇に取らむや（略）ト問う。このとき、神明倭迹迹日百襲姫命に憑りて曰く「略、吾を敬い祭らば必ず自平ぎなむ」とのたまう。（略）」

崇神天皇家の神「天照大神」と地元の神「倭大国魂」をご殿内に祀っていたが、共に住むことを心良しとしなかった。七年、疫病三年目、「天照大神」「倭大国魂」には、崇神の御殿から去ってもらう必要があった。

天照大神を崇神の娘・豊鋤入姫に託して、ご殿の外の笠縫邑に祀った。これが「皇居外に皇女（斎宮）が仕えて天照大神をまつる」伊勢祭祀の原点になった。大和の地主神「倭大国魂」を淳名城入姫に託すが、祭れず。

疫病はやまず、天皇は悩み、三輪山の神「大物主」に疫病退散を祈る祭祀に思い至り、神かかりの自作自演を行う。

三輪山の神「大物主」が、崇神の伯母・倭迹迹日百襲姫命にのりうつって、お告げを伝え、天皇の夢まくらに立つ。「殿戸に對ひ立ちて、自ら大物主と称りて曰く、吾が兄大田根子を以て吾を令祭りたまはば、立ちどころに平ぎなむ。（略）」

『自分の子の太田田根子に我をまつらせよ。』と言う。（この倭迹迹日百襲姫は、前方後円墳時代始まりの契機とされる著名な陵墓「箸墓古墳」の被葬者である。）

天皇は、太田田根子を探し求め、茅渟の縣の陶邑で見つけて会えた。群臣の前で太田田根子に問う。「汝は其れ誰が子ぞ。」とのたまふ。対へ曰はく「父をば大物主大神と曰す。母をば活玉依姫と曰す。陶津耳の娘なり。」といふ。物部連の祖・伊香色雄に占わせて吉しとなり、太田田根子を「大物主大神を祭る三輪神社」の神主にする、疫病が治まった。『・・・疫病はじめて息見て・・・』

太田田根子の父として記された「大物主」とは何者か。紀「崇神紀」の中で読み取ると、崇神王権を凌駕する力を過去に持っていた主と考えられ、崇神天皇家の遥か以前に、三輪山を中心とした地域に別系統の王権が存在したことを思わせる。紀記神話・先代旧事本紀にも、神武以前に物部氏の祖饒速日命が河内に先住したことが記されている。

『崇神紀』の太田田根子は、陶邑（五世紀に発祥に住み、母は活玉依姫という陶津耳（長）の娘である。奇特な現象に関わる「陶邑」とは？

「陶邑」は百舌鳥古墳群と同時期、隣接地域につくられた当時のハイテク産業泉北古窯址群集落のひとつ。「陶器山（MT）地区」（堺市中区上之）にあり、日本書紀の話なぞるかのように「陶荒田神社」（式内社）が、巨墳・大仙古墳から東南約六kmの地点にある。

祭神は高御産霊大神・劍根命高御産霊大神は、紀記天孫降臨神話の重要人物。また、劍根命はカツラギ族の祖

と伝えられ、延喜式作成者は『紀記』に従い式内社にした。他方、この神社は土蒙・荒田直の氏神であり、夏祭りに「だんじり」が出る。

泉北古窯社群の広大な遺跡の存在が見つかるのは、昭和三〇年（一九五五年）、ニュータウン建設のために泉北丘陵の雑木林を伐採している時であった。

調査は、一九六一年から開始され、泉北丘陵に広がる須恵器生産遺跡群は、「現在の堺市南区(全域)・大阪狭山市の一部分・和泉市の一部分・岸和田市の一部分」であり、約千基の窯跡が見つかり、初期の窯は古墳時代五世紀前半の巨大古墳「百舌鳥陵南古墳(伝履中陵)」と同時期につくられ、増減を経て八世紀・奈良時代まで稼働したことが判明した。

百舌鳥古墳築造以前は、百舌鳥野と呼ばれた原野に続く雑木林で、『崇神紀』の時代には陶邑の影も形もない。

【図1 百舌鳥古墳群に隣接する陶器窯跡群】

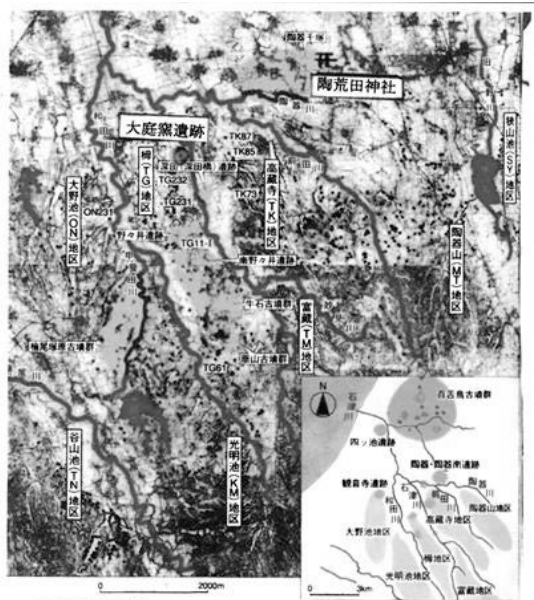


図15 陶器窯跡群の分布  
丘陵部と谷部から構成される泉北地区は、複雑に入り込んだ自然地形を構成している。とくに大川とその支流によって、窯跡の地区区分がなされている。

(原典『泉北丘陵に広がる須恵器窯』加筆 品川)  
この地に、小阪遺跡・野々井遺跡・暁尾遺跡・大庭寺

遺跡があり、次の記述がある。

「大庭寺遺跡は、梅丘陵北東の辺縁部の段丘上に形成された集落遺跡である。堅穴住居・溝・土器溜まり・初期須恵器窯などの遺構が検出され、初期段階須恵器を主とする。特に、遺物に渡来系の軟質土器が目立つことから、この集落は渡来系集団と思われる」(出典『泉北丘陵に広がる須恵器窯』)

発掘された約千基に及ぶ窯跡の灰原から採取された須恵器片を整理、形の変遷に着目・分類して「須恵器編年表」が作成され、須恵器の製作年代を判断する物差しが出来た。(元大阪府文化財課 仲村浩氏の研究・作成)

【図2 泉北須恵器編年表】



図2 泉北須恵器編年表  
出典 『泉北丘陵に広がる須恵器窯』陶器遺跡群 中村 浩  
2006年 新泉社

五世紀以前の須恵器は出土しない。

問題点は、『崇神紀』に記載された和泉・大鳥郡陶邑が、崇神時代から実在するかのよう誤って解釈されてきたことである。

崇神時代の年代については諸説あるが、『崇神紀』が記す「箸鼻古墳」を基に推定すると、三世紀後半になり、他方、陶村の実在は五世紀前半以後であり、太田田根子の生きた時代が一致しない。

『崇神紀七年条』は、二つの異なる時代の出来事を同時代として述作したパッチワーク。このパッチワークから、「敬い畏れねばならない疫病終焉の力を示す大物主」と陶邑が結び付く謎解きをしたい。

崇神時代に使われていたのは、八百度未満の焚火で容易に造れる赤色または、褐色の滲出性がある素焼きの土器(土師器)。「中国」で陶器が誕生したのは、紀元前千五百年前であり、紀元前三百年には、有名な秦始皇帝陵の等身大の將軍や騎兵、歩兵、官人などが「陶器」で作られ、彩色して埋葬されている。

朝鮮半島では、前漢による楽浪郡(BC一〇八〜AC一三)設置により、技術が伝えられ、穴窯で(千二百度)の高火度で焼成する青灰色を呈する陶質土器(炆器(セキキ))が登場。この炆器作成技術が五世紀の倭国に伝えられて須恵器と呼ばれた。出典、『アジア陶芸史』陶器(陶質土器)は固く滲出性が無い。

崇神時代には陶質土器の須恵器を作る技術が無く、文明格差は住居・製鉄・金属加工・文字文化にも及ぶ。

「朝鮮半島から陶質土器製作技術者を招き、穴窯を用い高火度の還元炎焼成で須恵器を作ろうとした。定着する以前の須恵器生産は、福岡県から瀬戸内海地域で発見されているが、本格的生産が確認されたのは大阪府大庭寺遺跡である。(略)その後の須恵器生産は、この大庭寺遺跡周辺に展開する陶村窯社群で急速に発展するが、こ

の地域は『日本書紀』崇神七年条にある「茅渟具陶村」に相当する。その後、全国に拡散し各地で生産されるようになったが、その背景には生活用具としての需要とともに古墳への副葬品として多くの需要があったことにも由来する。」(出典『アジア陶芸史』)。

「陶器」には原料の土質が重要であり、泉北陶窯跡群の粘土採取地を丈六(現・堺市東区・大山古墳の東南五・七km、標高六〇m)に見付けることが出来た。陶器は淡水成粘土を必要とし、適質な粘土採取地を探す技術は容易ではない。経験を積んだ大陸の技術者を招くには、土地・住居を用意して、生業が軌道に乗るまでの生活保障をする地元豪族が必要であり、経営者が存在した。

丈六から二km南に、陶村と陶荒田神社(堺市中区上之、標高七一m)が在り、離れて初期の窯址・大庭(寺) (堺市南区大庭寺、標高三一・四m)がある。

その大庭から登り窯を持つ集落が始まり百舌鳥古墳群南東斜面に散在して増え、広い須恵器窯群になって八世紀まで続いた。この斜面には、登り窯に適切な緩い勾配と燃料に出来る雑木林があり、条件を満たした。

『紀』の編集状況について『日本書紀の謎を解く』(森 博達)は記す。

「持統五年(六九五五年)唐人・續守言が雄略紀からの述作、薩弘格が皇極紀からの述作を担当した。慶雲三年(七〇七年)突如、文章博士山田史御方は、神代から安康紀までの述作を命じられた。」

『崇神紀』述作に際して、山田史御方は、自身の時代よりも約二五〇年前、百舌鳥古墳群の近傍で、初めて陶質の須恵器が多量生産された事実を知らなかったのか。三輪山祭祀の主・大物主と、その子孫が、何故陶村と関わるのか。疑問が、次々に生まれる。

初期の窯「大庭」窯の地名の伝播を物部氏の氏族伝承『先代旧事本紀』から求めたい。

日本史家・鳥越憲三郎氏は、述べる。「物部氏の降臨伝承には、降臨に供奉した三十四族が列記されている。」

その中に、「片野物部」「大庭造」がある。先に、「片野物部」から述べる。

降臨伝承は、物部族が船で河内・咲ヶ峰に到着したことを記し、乗船していた磐船が、磐船神社に残ると言う。

「近くのJR河内磐船駅周辺に、五世紀の鉄鍛冶專業集落地・森遺跡(大阪府交野市)があり、短甲製作地の一つに推定されている。」(出典『森遺跡』交野市教委)

【図3 森遺跡図】

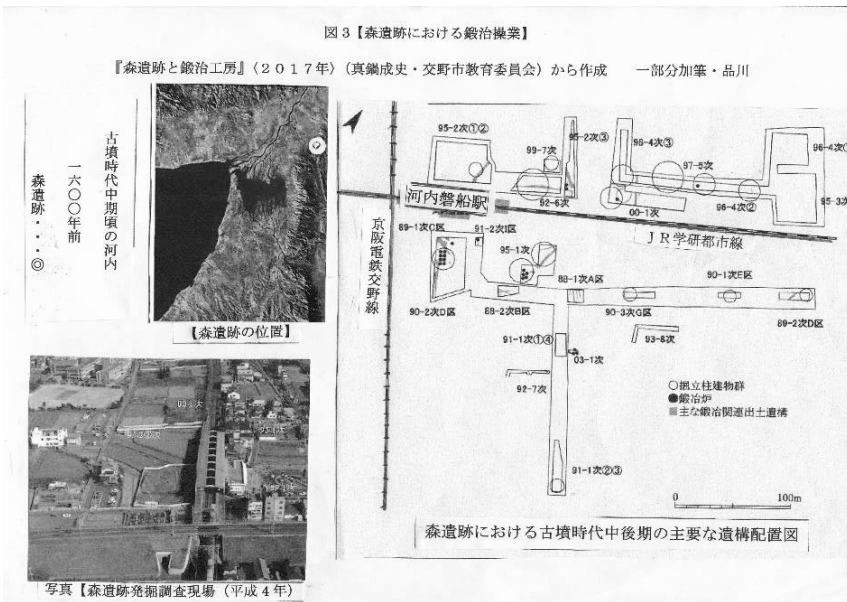


図3【森遺跡における鍛冶作業】

【森遺跡と鍛冶工房】(2017年) (真鍋成史・交野市教育委員会) から作成 一部分加筆・品川



遺跡発掘の記録から「森遺跡は、交野市森南地区に所在し、その範囲は地区のほぼ全域にわたる。市内を直交する形で走るJR学研都市線と京阪電鉄の交わりとこる、駅名では河内磐船と河内森駅周辺を中心とした地域。(略)この地域は市内を南北に貫く形で流れる天の川の岸がすぐ傍まで迫っており、川の恩恵をうけた肥沃な土地であった。(略)森遺跡は、これまでの調査により五世紀後半〜七世紀初頭にかけて鍛冶生産を中心とした工人集落であると想定してきた。事実、フイゴ羽口、鉄滓、砥石等が多量に出土し、これに伴って作業場と住居の分離した掘立柱建物を検出している。」(出典『森遺跡』交野市教育委員会)

更に、森遺跡は、「美作・旭川上流・誕生寺流域に居住していた片野物部族」の一部が北河内に移住して出来たという研究がある。(出典『片野物部氏と鉄・鉄器生産』交野市教委・真鍋成史二〇一一年)

JR津山線弓削駅から数キロ。片野物部所縁の仏教寺がある。仏教寺は、七二〇年(和銅三年)、片野物部乙麻呂寄進建立と伝えられ、旭川上流に製鉄関連遺跡があることから、片野乙麻呂の経済力の源は製鉄遺跡に関わる鍛冶技術と推定できる。

「真金吹く吉備の中山」とうたわれるが、「中山」は砂鉄を産する美作にあり、美作一宮、式内社・中山神社が鎮座している。乙麻呂の遙か以前に移住した祖先の片野物部族は北河内に鍛冶工房集落をつくり、故郷の名・カタノと名付けた。

もう一つの河内における大型の鍛冶の郷は、生駒山麓の西側、扇状地上に位置する「大泉遺跡」。南北六五〇m東西五〇〇m、五世紀後半から六世紀後半まで稼動した。(出典『鍛冶の郷・大泉と田辺』)

記述を陶村に戻し、和泉・大鳥郡大庭の母村を探す「饒速日降臨に供奉した三十四族の中に大庭造があり

「大庭造(筑前・上座郡把伎郷大庭村)(和泉・大鳥郡大庭」と記す。」(出典『古代物部氏と先代旧事本紀の謎』母村・筑前上座郡把伎郷大庭村は、現在も「福岡県朝倉市大庭」として存在して、和泉・大鳥郡大庭村の原点(母村)に推定できる。

【図4 九州に存在する大庭村の母村の地図】



(筑前上座郡把伎郷大庭村は、現・福岡県朝倉市大庭) 大物主と陶村の關係は、陶村発祥地の第一号窯(大庭(現、堺市南区大庭寺)の母村・筑前把伎郡大庭に居住した古代筑紫の原始物部族集団との繋がりを示す。

原始物部族は、紀元前九世紀から、東に向けて水田稲作開拓地を求めて移民を重ね、紀元前七世紀ころ河内湾

岸に辿り着き、その一員「大庭物部造」族が、百舌鳥南の丘陵地に移り住み、五世紀に朝鮮半島の作陶技術者を招き、雇用して須恵器生産を経営したと考える。

泉北陶窯趾群には、高蔵・片蔵・富蔵の地名・寺社(高蔵寺・桜井神社・感応寺)があり、陶器の保管・集配センターと推定され、小船に積まれた品は和田川・前田川・陶器川から石津川に出て、石津湊から運ばれた。

原料の採掘運搬・穴窯作成・燃料伐採・作陶焼成・製品管理・集配等の分業を『大庭物部造』族が統率経営。

『古事記』では崇神天皇の御代、「河内の美努村にその人を見て貢進りき」と記し、大田田根子は河内若江郡三野郷村に住んでいたとする。「見努(御野)(三野)」は現在の八尾市上ノ島町南にあり古代の大王家直轄地・御野県主神社が旧大和川玉櫛川堤防沿いに位置し、境内には堤防の一部分が残り、鬱蒼とした木立が見事。

しかし、河内の美努村は「窯業生産との関係から見れば可能性はない」。(出典『泉北丘陵に広がる須恵器窯』)

「僕は、大物主の大神、陶津耳命の女活玉依毘売を娶って生みましし子、名は櫛御方命の子、飯方巢見命の子、タケミカツチ命の子、僕は意富多多泥古ぞ」と曰き、と。

(『古事記』三輪山の物部主神)

『日本書紀』の記述と異なる『古事記』の地名・河内の美努村は、旧大和川玉櫛川流域に、物部族が紀元前七世紀頃、初期水田稲作地を開拓したことを示唆。

『先代旧事本紀』によると降臨伝説の天磐船を操った六氏族の名前が書いてある。

- 日船長跡部首らの祖、天津羽原(筑前鞍手郡勝田郷(河内) 渋川郡跡部郷。日船取阿刀造らの祖大麻良(河内) 渋川郡跡部郷。日船子倭鍛師らの祖、天津真浦
- 日笠縫らの祖、天津麻良(摂津 東成郡笠縫村)
- 日曾曾笠縫らの祖、天津赤麻良(大和)十市郡飯富郷笠縫
- 日為奈部らの祖、天津赤星(摂津)河辺郡為奈郷。

このあとに続いて降臨に供奉した三十四族を列記。

六氏族は物部本宗直属の一族であり、船長の跡部の子孫で現地に残ったものは、天文年間・鞍手郡の劍岳城主・跡部安芸守として地方の有力者になっている。

他方、河内に移住した物部本宗直属の跡部は、「亀井村跡部に住み、現在でも八尾市跡部に式内小社がある。」(出典『古代物部氏と先代旧事本紀』)

注目するのは、渋川郡跡部郷(八尾市跡部)が古大和川本流(長瀬川)の中央に位置する交通の要衝であり、物部本宗が古大和川水系の水運・灌漑網管理・交易する場所に適した地形。(実例六世紀・物部守屋の領域を参考)

先に述べた『古事記』河内の美努村伝承は古大和川支流玉櫛川の水運・灌漑水路網を掌握した物部族を示唆し、河内の古大和川水系の土地を水田稲作地に開拓、経営したことを物語る。大和川水系を制する者は、河内を制する。物部族は河内全域を経営した。

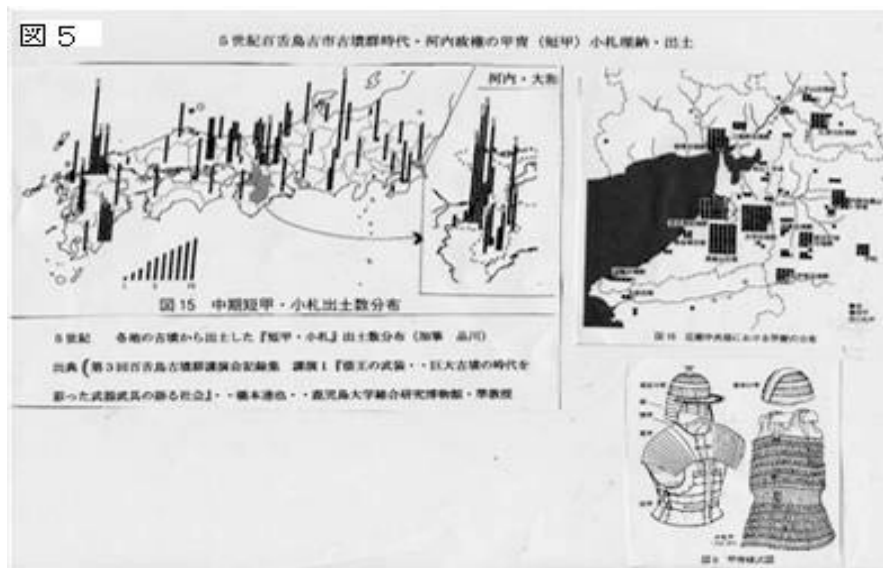
歴史学者・森浩一氏は、『大阪府史』で述べる。「陶荒田神社の字名を「太田」と言い、三輪山麓の北西にも「太田」と言う地名があつて古墳前期以来の大きな集落遺跡が判明し「太田遺跡」とも言うが、最近は纏向遺跡の名称に統一され祭祀に関する遺構の多い点でも注目されている。」(P七七八〇)

「太田田根子の説話の骨組みは、大阪府南部の須恵器生産地帯に新しいタイプの祭政推進者がいて、それに大和の象徴ともいべき三輪山の祭祀を執行させ、政治的平静を回復した。」(P七八四)

五世紀、河内の手工業多量生産地(泉北古窯址、大泉遺跡・森遺跡)開発と大和川水系運営に関わった物部族を主軸にして「百舌鳥古市古墳群」が出現する。

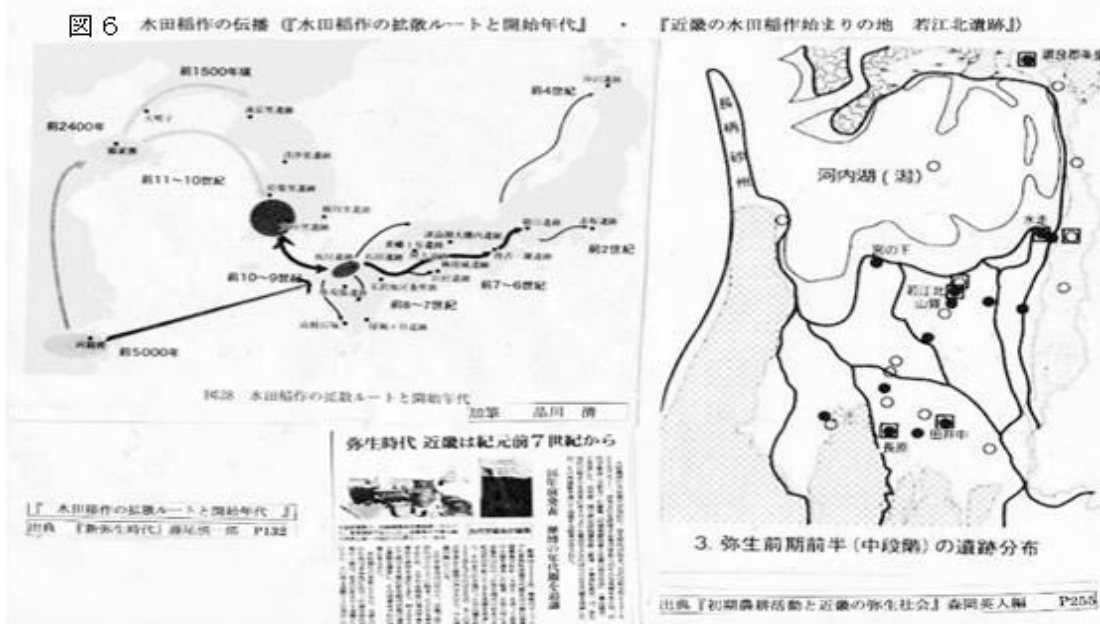
「百舌鳥古市古墳群」の特色は、未だ鉄製品が貴重な時代に、鉄製・剣・短甲出土数量が、他の地域に比べて圧倒的に多くなった変化である。

河内勢力の大きな軍事力を表し、巨墳造成に従事する  
 多人数の労働者に甲冑を着せ、武器を持たせれば常備軍が  
 出来る。



【図5】河内政権の甲冑(短甲)小札埋納出土数量  
 古墳時代の手工業を担った河内・奈良盆地の豪族は九州  
 島に先祖(母村)を持ち、紀元前十〜九世紀に水田稲作の  
 技術を携えて、東に向かい、各地に初期水田稲作地を造  
 り、紀元前七世紀頃に古河内湾の若江北遺跡に着いた。  
 (出典『初期農耕活動と近畿の弥生社会』P125)

【図6】「水田稲作の伝播」



九州島から東進した近畿諸豪族の母村を、『和名類聚抄郷名考証』は、次のように記す。

肥前基肆郡・姫(紀) 肥前小城郡・伴部(大伴)  
 肥前三根郡・葛木 筑前早良郡・平群、額田  
 豊前仲津郡・中臣、鴨(加茂)

この他にも、紀元前の九州島稲作民の東進は列島各地  
 に様々なムラを生み激動の時代をつくった。  
 皇国年号では、今年が皇紀紀元二六八〇年に当たり、  
 奇しくも紀元前七世紀・若江北遺跡に水田稲作が伝播し  
 た年代と皇紀元年の時代がおよそ一致する。不思議な一  
 致は、紀元前九世紀に始まる九州島稲作民の東進が大物  
 主の実態に関わることを示している。

パッチワーク『崇神紀五〇七年条』は、大物主の謎と  
 疫病蔓延が、祭祀移動・政権移動・新産業地誕生等の変  
 動を引き起こしたことを語り、その変動は五世紀前方後  
 円墳時代の絶頂期、百舌鳥古市古墳群時代を誕生させ社  
 会変革を生じた。

現代のコロナウイルス蔓延は、どのような変革を齎す  
 のだろうか。平成「国家資産帳簿改竄指示」等あつては  
 ならない。  
 記二〇二〇・八  
 (東大阪文化財を学ぶ会)

参考文献

- 『大阪府史 第一巻』大阪府 昭和五三年
- 『古代物部氏と先代旧事本紀』安本美典 平成二年
- 『泉北丘陵に伝がる須恵器器』中村浩 2006年 新泉社
- 『アジア陶芸史』出川哲郎 中ノ堂一信 弓場紀知 2012年
- 『日本書紀の謎を解く』森博達 1999年 中央公論社
- 『片野物部氏と鉄・鉄器生産』真鍋成史 2011年
- 『初期農耕活動と近畿の弥生社会』編 森岡秀人 2018年
- 『古事記』次田真幸 講談社学術文庫
- 『日本書紀』坂本太郎・家永三郎 岩波文庫
- 『森遺跡』交野市教育委員会 1991年
- 『名類聚抄郷名考証』池辺彌 昭和四一年
- 『鍛冶の里 大泉と田辺』柏原市立歴史資料館 2018年